日本が再出発するための原点

列島保全への課題

「国土学」が解き明かす日本の再興④

リアリズムを取り戻すことが必要

戦争を知らない政治家とリアリズム喪失

この国のあらゆる場所からリアリティーやリアリズムというものが消えうせ、観念論に基づく空疎なスローガンだけが国全体を覆っている。田中角栄だったと記憶するが、彼が「戦争を知らない政治家ばかりの時代になると大変なことになる」と述べたことがある。

あの角栄がこのようなことを言うのかと驚いた記憶があるが、いま考えると、これは恐るべき予言だったと感じ入るのだ。戦前・戦中を知る政治家は、政治がリアリズムを失うと結局、国家を失うということを肌で知っていた人たちだった。

GDPが日本の10倍もあり、鉄鋼の生産能力や自動車の生産台数が一桁どころか二桁もわが国を凌駕している国に正面から宣戦布告をするという愚かなリアリズムの喪失が国家を滅ぼしてしまった。

司馬遼太郎氏は、これを指して「この国は時にリアリズムを失うことがある」という意味のことを述べたが、最近の実態を見ると「この国は時にリアリズムを持つことがあった」と言う方が正しい気がする。

新自由主義経済学という観念論の弊害

戦争を知らない世代の政治家が行ってきたのが、新自由主義経済学という「小さな政府・規制緩和・自由化・民営化・グローバル化」を目指すこと。そして、プライマリーバランスなる世界のどの国も用いていない指標を金科玉条として掲げ、歳出削減に励んできたことだった。

しかし、その当然の結果として国民の貧困化、労働者の非正規雇用化、結婚できない所得層の増大を生んでしまった。「国民を豊かにし、福利をもたらすこと」でこそ、政治家は国民から権力を付与されているという根本原則がないがしろにされているのだ。

新自由主義経済学という貨幣の理解からして間違っている「観念論経済学」が政治を席巻してしまった。それは、政治がリアリズムを喪失して、あり得もしない財政破綻論を信奉してきたからなのである。国民を豊かにできない政治がまっとうで正しい政治であるはずがない。

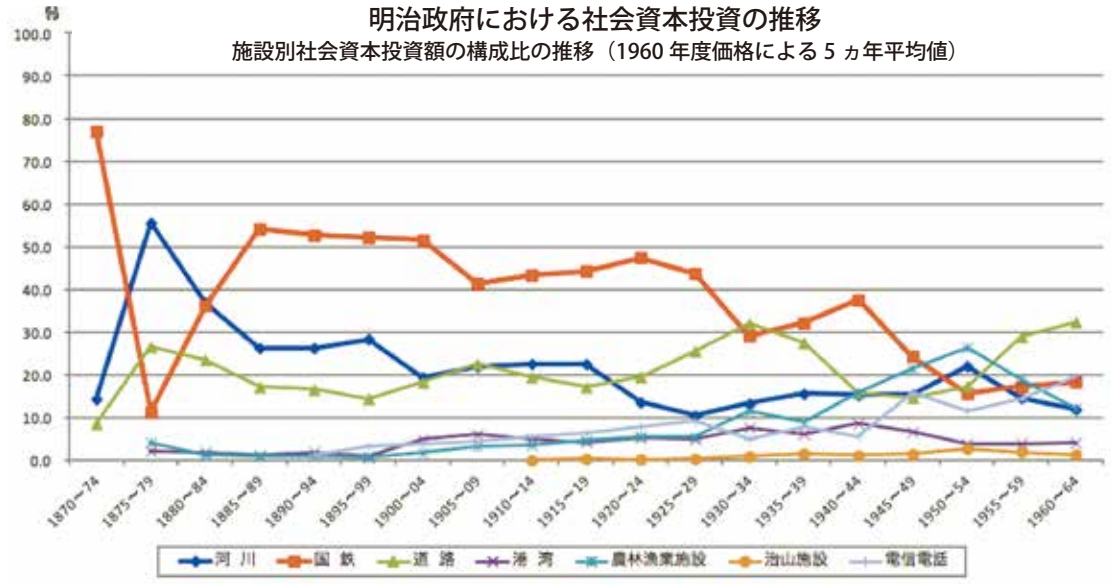
明治維新を成し遂げた明治人のリアリズム

リアリティーを喪失すると、具体的には何をすることなのかを示せないままバズワードである「構造改革」という言葉が横行したり、「○○であるべきだ論」的な観念論がはびこるのは当然の成り行きである。

われわれ日本人は、なぜかくも短い時間でリアリズムを喪失して、危機感を失っていくのだろうか。

明治維新を成功させた人々が運営した初期の明治政府は、見事にやるべきことをやるべき手順で成し遂げてきた観がある。司馬遼太郎氏は明治の政策は明治10年頃までは完璧だったという意味の言葉を残している。

それは、明治の初めの人々がリアリズムを有しており、それに基づく施策を繰り出してきたからである。リアリズムは国語辞典では「現実主義」などと説明されているが、「事実を踏まえなければ政策や対策の議論もできないという考え方」と説明する方がよいと考える。このように「リアリティー」を日本語としてぴったりとした言葉を持てていないことが、われわれがリアリズムを欠くことが多いことを証明している。



注１：経済企画庁総合開発局「政府固定資本形成および政府資本ストックの推計」1966 年 5 月を用いて算出した。
注２：1870 ～ 74 年の国鉄は 1872 ～ 74 年の 3 ヵ年平均値、1875 ～ 79 年の農林漁業施設は 1877 ～ 79 年の 3 ヵ年平均値、1910 ～ 14 年の治山施設は 1911 ～ 14 年の 3 ヵ年数値である。
出典：「公共投資１００年の歩み」沢本守幸　を元に作成

鉄道歴史展示室として再現された旧新橋停車場駅舎。鉄道開業の地東京・汐留の歴史を紹介し、日本の近代化をけん引した鉄道の発展を学べる

鉄道整備による国土の一体的利用

幕末期の武士から庶民に至るまでの日本人は、西洋列強に好きなようになぶられている清国を見て「わが国も早急に近代化しなければ危うい」との共通認識を持った。遣唐使の廃止などによりわが国には豊かな和風文化も育ったが、歴史の全期間を通じて中国は、日本人には文化的にも常に仰ぎ見る存在だった。

その中国の、のたうち回る姿がわれわれの反面教師だったのである。

司馬遼太郎氏の指摘どおり、明治初期政府の施策は見事なものだった。全国に素早く学制を敷き教育体制を整えるとともに、軍制を整備した。年貢米制度から土地価格に税を課す地租改正と戸籍の整備を行って税制を整備し、極めて早期に全国に通信網をめぐらせた。

鉄道網によって全国を結ぶのも早かった。特筆すべきは、現在の東海道本線にあたる東京～神戸間を１８８９年に完成させた２年後の１８９１年には上野～青森間を結んだのだ。戊辰戦争の影響があったにせよ、国土の一体化、国土の一体的利用にかけた明治初期人の意気込みと判断の正しさには驚くばかりである。

ちなみに東北新幹線・上野～新青森が全通したのは２０１０年であり、東海道新幹線開通後46年もたっている。費用対効果ばかり追いかけるのか、それとも国土全体を利用しやすくするとの考えに立つのか、明治人より現代人の方が進んでいるとは決して言えないことがわかるのだ。

ところが、このリアリズムに満ちた政策を繰り出した明治人も、１８９４年の日清戦争を経て１９０５年の日露戦争に勝利する頃になると事大主義がはびこり始めた。満州にこだわり、アジアの希望の星からみるみるうちにアジアの侵略者に変身していったのである。

「国土学」が解き明かす日本の再興　大石久和著

「国土に働きかけなければ、国土からの恩恵は得られない」と国土学を提唱する著者が、日本国土の自然・地理的条件や、日本人特有の歴史観・死生観を、諸外国と比較しながら多角的に分析し、日本国家にもっとも適した国づくりの方針を導き出します。

発行：海竜社
定価：１７００円＋税